（城西人文研究第16巻第2号）

【研究ノート】

井泉水編『一茶俳句集』入集の句（五）

黄色瑞華

凡例

一　一行めに、井泉水編『一茶俳句集』の本文をおく。ただし、漢字は現行文字とし、ルビは省略した。

二　二行めに、出典を示し、句帳・紀行などは（　）内にそれが記されている条の年月を示した。年号は改元の月日にかかわらず元年一月からとした。

三　原本と表記が異るものは、出典の次の㊟に原本のそれを示した。

四　注は、「前書」の異同と、他書との異同を示すにとどめた。

五　原典は、主として一茶全集本により、『浅黄空』などは一茶叢本その他によった。また、『八番日記』は風間本により、特に異同がある場合、梅塵本と対照した。

夏（承前）

蓮

蓮の香をうしろにしたり岡の家　（享和三年）

出典　享和句帳（享和3・4）

御祝に飴をめせめせ蓮の花　（文化三年）

出典　文化句帳（文化3・4）

㊟　中七「飴をめせ〳〵」。

蓮咲くや八文茶漬二八そば　（文化十三年）

出典　七番日記（文化13・6）

蓮池やうしろつんむく乞食小屋　（文政二年）

出典　八番日記（文政2・9）

咲花も此世の蓮はまがりけり　（文政二年）

出典　八番日記（文政2・6）

撫子

なでしこに二文が水を浴せけり　（文政二年）

出典　八番日記（文政2・6）・おらが春

㊟　八番日記、上五「なでしこに」。おらが春、座五「浴セけり」。

なでしこや地蔵菩薩の迹先に　（真蹟）

出典　真蹟

㊟　前書「箱根山さいの河原」。七番日記（文化9・5）に、「御地蔵〔よ〕河なでしこたゞ頼む」。株番（文化9）に、上五「御地蔵よ河原なでしこたゞ頼む」。

釣葱

水かけて夜にしたりけり釣葱　（文化十一年）

出典　七番日記（文化11・夏）・句稿消息（文化11）

㊟　句稿消息、座五「釣り葱」。

杜　若

消炭の見事に干たり杜若　（文化元年）

出典　文化句帳（文化1・4）

杜若妹がなべずみかかる也　（文化三年）

出典　文化句帳（文化3・5）

㊟　座五、「かゝる也」。

花菖蒲

見るうちに日のさしにけり花せうぶ　（文化二年）

出典　文化句帳（文化2・4）

㊟　座五「花せ（しゃう）ふぶ」。

住吉のすみの小隅もせうぶ哉　（文化八年）

出典　七番日記（文化8・4）

㊟　中七以下「すみの〔小〕隅もせ（しや）うぶ哉」。

百合の花

長降りの節の明らん百合の花　（享和三年）

出典　享和句帳（享和3・5）

㊟　座五「百合〔の〕花」。

萍

萍や黒い小蝶のひら〳〵と　（享和三年）

出典　享和句帳（享和3・4）

萍や花咲く迄のうき沈　（文化十一年）

出典　七番日記（文化11・夏）

㊟　座五「うき涙（沈）」。希杖本句集、座五「浮しづみ」。

萍や浮世の風のいふなりに　（文政三年）

出典　八番日記（文政3・6）・嘉永版発句集

萍や魚すくふ（ママ）たる小菅笠　（しだら）

出典　希杖本句集

早苗

旅人や野にさして行流れ苗　（文政五年）

出典　文政句帳（文政5・5）

麦

山水の溝にあまるや田麦刈　（享和三年）

出典　享和句帳（享和3・4）

麦刈の不二見所の榎哉　（享和三年）

出典　享和句帳（享和3・4）

麦の穂や私方は竹の出来　（享和三年）

出典　享和句帳（享和3・4）

㊟　右三句、四月十七日の条の「麦刈」の句四句中の三句。「麦刈の」は第一句め、「山水の」は第二句め、「麦の穂や」は第四句めに出。

木更津に入

旅めくや柳のかげの小麦餅　（享和三年）

出典　享和句帳（享和3・11）

㊟　十一月の条に、「廿一日晴、木更津ニ入」として、この句以下を記す。「木更津ニ入」は記事。また、この一句、逆さ書きとし、付句「所かはれば鐘もうれしき」を添えてある。なお、全集本「発句集」の索引は二句合わせて「(歌)」と注する。

門〳〵や月をみかけて麦をつく　（文政元年）

出典　七番日記（文政1・6）

㊟　中七「月を見かけて」。

麦秋や子を負ひながら鰯売　（文政二年）

出典　おらが春（文政2）・発句鈔追加

㊟　おらが春、前書「越後女、旅かけて商ひする哀さを」。中七以下「子を肩(負)ながらいはし(わ)売」。

麦搗や行燈釣るす門榎　（文政八年）

出典　文政句帳（文政8・3）

麦　藁

むら雀麦わら笛におどる(ママ)也　（文化十一年）

出典　七番日記（文化11・5）

㊟　座五「おどる(を)也」。

芦の葉

片意地に芦の片葉や法花村　（文政七年）

出典　文政句帳（文政7・閏8）

㊟　八番日記（文政4・9）、「片意地や芦も片は(葉)の法花村」。

苔の花

我上にやがて咲らん苔の花　（文化十二年）

出典　七番日記（文化12・4）・随斎筆紀

㊟　寛政三年紀行、「苔の花我も心に思ふやう」。文政句帳・一茶翁終焉記、上五・中七「我上へ今に咲くらん」。

若竹

そよげそよげそよげわか竹今のうち　（文化七年）

出典　文化三（文化句帳補遺）―八年句帳写（文化7）

㊟　「そよげ〳〵〳〵」。七番日記（文化7・4）、「そよげ〳〵さら〳〵〔竹〕のわかいうち」。

わか竹や山はかくれて入間川　（文化十一年）

出典　七番日記（文化11・4）

㊟　希杖本句集、上五「若竹に」。

竹の子

笋や鶯親子連立て　（文化五年）

出典　文化句帳（文化5・4）

笋も御僧もまめでおじ(ママ)やつたよ　（文化十三年）

出典　七番日記（文化13・4）

㊟　座五「おじ(ぢ)〔や〕つたよ」。

瓜

待もせぬ月のさしけり冷し瓜　（文化元年）

出典　文化句帳（文化1・6）

人来たら蛙となれよ冷し瓜　（文化十年）

出典　七番日記（文化10・6）

㊟　句稿消息・発句題叢・文政版発句集・希杖本句集・嘉永版発句集、中七「蛙になれよ」。

西瓜

瓜西瓜ねん〳〵ころり〳〵哉　（文化十三年）

出典　七番日記（文化13・5）

初瓜を引とらまへて寝た子哉　（文政二年）

出典　おらが春（文政2）・嘉永版発句集

㊟　おらが春、上五「はつ瓜を」。嘉永版発句集、中七以下「引とらまいて寝た子かな」。

真桑瓜

さと女笑顔して夢に見へ(ママ)けるままを

頬べたにあてなどしたる真瓜かな　（文政二年）

出典　おらが春（文政2）・発句鈔追加

㊟　座五「真瓜哉」。

茄子

苗売の通る跡より初なすび　（享和三年）

出典　享和句帳（享和3・4）

若葉

わか葉吹〳〵とて寝たりけり　（文化四年）

出典　文化句帳（文化4・4）

桑の木や旦々の初わか葉　（文化七年）

出典　七番日記（文化7・4）

辻番の窓をせうじを若葉哉（文化十一年）

出典　七番日記（文化11・4）

㊟　中七以下「窓をせうじ（しや）をわか葉哉」。

わか葉して又もにくまれ榎哉　（文化十一年）

出典　七番日記（文化11・4）・句稿消息・発句題叢・希杖本句集・嘉永版発句集・発句鈔追加

ざぶ〳〵と白壁洗ふわか葉哉　（文政元年）

出典　七番日記（文政1・5、12）

橋守が桶の尻干すわか葉哉　（文政元年）

出典　七番日記（文政1・5）

わか葉して御八日講の幟哉　（文政元年）

出典　七番日記（文政1・5）

わか葉して中ぶらりんの曇り哉　（元政五年）

出典　文政句帳（文政5・4）

青　葉

梅の木の心しづかに青葉哉　（寛政四年）

出典　寛政句帳（寛政4）

㊟　座五「青葉かな」。

とぶ蝶や青葉桜も縄の中　（文化元年）

出典　文化句帳（文化1・3）

夏木立

鵲の声のみ青し夏木立　（寛政四年）

出典　寛政句帳（寛政4）

登拝す御廟は白し夏木立　（寛政七年）

出典　西国（寛政）紀行（寛政7・4）

㊟　上五「遙拝す」。西国紀行には、「八日、誉田祭。『砂盛や打水や笹はたき哉』又、空海上人雨祈給ふ井社内にありて」として、「更衣ふりかけらるゝ湯花哉」と、この句を記す。

家ありて又家ありて夏木立　（享和三年）

出典　享和句帳（享和3・5）

ふりかけていく日の雲や夏木立　（享和三年）

出典　享和句帳（享和3・11）

湯も飯も過しお寺や夏木立　（文化元年）

出典　文化句帳（文化1・6）

堂守が茶菓子売る也夏木立　（文化十二年）

出典　句稿消息（文化12）・文政句帳（5・5）

㊟　文政句帳、中七「茶菓子うる也」。七番日記（12・6）、中七以下「茶菓子売也木下闇」。

夜駄賃の越後肴や夏木立　（文政三年）

出典　八番日記（文政3・4）

㊟　上五「夜駄ちんの」。

人声に蛭の降る也夏木立　（文政八年）

出典　文政句帳（文政8・2）

茂　り

伊香保根や茂りを下る温泉の煙　（寛政四年）

出典　寛政句帳（寛政4）

㊟　座五「温泉〔の〕煙」。

君が世や茂りの下の耶蘇仏　（寛政五年）

出典　寛政句帳（寛政5）

㊟　座五「那蘇（耶）仏」。

雨灰汁に月のちらちら茂り哉　（享和三年）

出典　享和句帳（享和3・4）

㊟　中七「月のちら〳〵」。

住の江の隅の餅屋の茂り哉　（文化九年）

出典　七番日記（文化9・5）

笹の葉に飴を並る茂り哉　（文化九年）

出典　七番日記（文化9・5）

㊟　前出「住の江の」の五句前に出。

しげり葉や庇の上の湯治道　（文政五年）

出典　文政句帳（文政5・4）

木下闇

堂守が茶菓子売也木下闇　（文化十二年）

出典　七番日記（文化12・6）

㊟　句稿消息（文化12）、中七以下「茶菓子売る也夏木立」。文政句帳（文政5・5）、中七以下「茶菓子うる也夏木立」。

作りながら草履売るなり木下闇　（文政四年）

出典　八番日記（文政4・9）

㊟　八番日記（4・6）、中七「わらぢ売（濁ママ）なり」。文政句帳（文政8・7）、中七「わらぢ施す」。

権禰宜が一人祭りや木下闇　（文政八年）

出典　文政句帳（文政8・6）

楠の花

楠の花人から先へ石になる　（文政八年）

出典　文政句帳（文政8・6）

柿の花

役馬の立眠りする柿の花　（文政三年）

出典　八番日記（文政3・6）

合歓の花

寝ぐらしやねぶちよ念仏合歓の花　（文政三年）

出典　八番日記（文政3・7）

㊟　梅塵本八番日記（文政3）、中七「ネブチョ仏に」。

合歓さくや七つ下りの茶菓子売　（文政五年）

出典　文政句帳（文政5・6）

㊟　中七「七ツ下りの」。

紫陽花

紫陽花の末一色と成にけり　（文化元年）

出典　文化句帳（文化1・5）

卯の花

卯の花や葬の真似する子ども達　（文化元年）

出典　文化句帳（文化1・4）

㊟　上五「卯〔の〕花や」。

卯の花や水の明りになく蛙　（文化元年）

出典　文化句帳（文化1・4）

㊟「卯の花や葬の真似する」の二句前に出。

卯の花や臼の目切と鶯と　（文化六年）

出典　文化六年句日記（文化6・3）・文化六年三月二十付春甫あて書簡・文化三―八年句日記写（文句句帳補遺）（6・3）・発句題叢・希杖本句集・嘉永版発句集・発句鈔追

卯の花や子供の作る土だんご　（文政四年）

出典　八番日記（文政4・4）

卯の花や垣のうちらの俄道　（文政五年）

出典　文政句帳（文政5・4）

㊟　原本、「泥道を出れば卯花なかりけり」の次に、「――や垣のこちらの俄道」。全集本、「泥道や」と校訂、索引も「泥道や垣のこちらの」とする。ただし、発句篇では「卯〔の〕花や」とする。一茶叢書本、「――や」と原本のままとし、索引に「卯の花や垣」とする。季語は明らかに「卯の花」であり、「泥道」は「俄道」と重なるから、「卯の花」と校訂すべきである。

卯の花や子らが蛙の墓参　（文政八年）

出典　文政句帳（文政8・4）

茨

五月十九日、柏原に入、村人誰かれに逢ひて我家に入、きのふ心の占のごとく素湯一つとも言ざれば、そこ〳〵にして出る

故郷やよるもさはるも茨の花　（文化七年）

出典　七番日記（文化7・5）・真蹟

㊟ 七番日記、文化七年五月の条に「十九日雨。辰刻柏原ニ入。小丸山墓参。村長誰かれに逢ひて我家に入る。きのふ心の占のごとく素湯一つとも言ざればそこ〳〵にして出る。」として、この句を記す。表記は、「古郷やよるも障も」。真蹟に、「柱ともたれしなぬし嘉左衛門といふ人に、あが仏の一紙いつはりとられしものから、魚の水に放れ、盲の杖もがれし心ちして、たのむ木陰も雨降れば、一夜やどるよすが（衍字な）もなく、六十里来りて、墓より直に又六十里外の東へふみ出しぬ。『古郷やよるもさはるも茨の花』ま〻子一茶」。

鬼茨も花咲にけり咲にけり　（文化十三年）

出典　七番日記（文化13・4）

茨垣や上手に明し犬の道　（文政五年）

出典　文政句帳（文政5・4）

梅の実

青梅も十三七つ月よ哉　（文化九年）

出典　七番日記（文化9・7）

痩梅もなりどし持てなりにけり　（しだら）

出典　発句題叢（文政3）・希杖本句集

㊟ 文政句帳（文化・3・5）、「痩梅のなりどしもなき我身哉」。板本発句題叢（文政3）・発句鈔追加、「痩梅のなり年さへもなかりけり」。

李

御地蔵の玉にもち添ふ李哉　（真蹟）

出典　真蹟

秋

菊月

菊月や外山は雪の上日和　（文政五年）

出典　文政句帳（文政5・9）

秋立つ

笠紐に涼しき秋の立にけり　（文化三年）

出典　未詳

㊟　文化句帳（文化3・7）、中七以下「はや秋風の立日哉」。

秋立や峰の小雀の門なるる　（文化二年）

出典　文化句帳（文化3・7）

㊟　座五「門なるゝ」。

秋立や朝飯の板木の間より　（文政五年）

出典　文政句帳（文政5・6）

今朝の秋

門畠のはれ〴〵しさよけさの秋　（文化元年）

出典　文化句帳（文化1・7）

けさ秋や瘧の落ちたやうな空　（文政二年）

出典　八番日記（文政2・7）

㊟　座五「やうに(な)空」。梅塵本八番日記、「初秋や瘧の落たやうな空」

残暑

荻の葉にひら〳〵残る暑さ哉　（文化八年）

出典　我春集（文化8）

㊟　座五「暑〔さ〕哉」。

秋寒

秋寒し鳥も糊つけほほん哉　（文化十三年）

出典　七番日記（文化13・閏8）

㊟　中七以下「鳥も粘(糊)つけほゝん哉」。

やや寒

洲崎詣

漸寒き後に遠くつくば山　（享和三年）

出典　享和句帳（享和3・7）

うそ寒や如意輪さまもつくねんと　（文化十一年）

出典　七番日記（文化11・9）

うそ寒や垣の茶筅の影ぼうし　（文化十三年）

出典　未詳

㊟　板本発句題叢（文政3）・希杖本句集・嘉永版発句集・発句鈔追加に、「朝寒や――影法師」。

狼の糞さへそぞろ寒かな　（文政二年）

出典　八番日記（文政2・9）

㊟　風間本八番日記、中七以下「糞さいそぞろ寒かな」。梅塵本八番日記、「糞さえそぞろ」。自筆本句集、中七「糞を見てさへ」。七番日記（文政1・12）、「狼の糞を見てより草寒し」。おらが春、上五・中七「狼ハ糞ばかりでも」。

肌　寒

肌寒やむさしの国は六十里　（文化十三年）

出典　七番日記（文化13・9）

朝　寒

深川の家尻も見えて朝寒き　（文化元年）

出典　文化句帳（文化1・9）

㊟　中七「家尻も見へて」。

朝寒や梅干桶も旅のさま　（文化二年）

出典　文化句帳（文化2・閏8）

朝寒し〳〵と菜うり箕うり哉　（文政二年）

出典　文化句帳（文化2・閏8）

㊟　前掲「朝寒や」の次に出。

朝寒や茶腹で巡る七大寺　（文政四年）

出典　八番日記（文政4・9）

㊟　梅塵本八番日記、中七「茶漬で巡る」。

夜寒

やや寝よき夜となれば夜の寒哉（ママ）　（寛政六年）

出典　寛政句帳（寛政6）

㊟　上五「やゝ寝よき」。

山見るも片ひざ立て夜寒哉　（文化元年）

出典　文化句帳（文化1・9）

㊟　中七「片ヒザ立て」。

先住がめでし榎も夜寒哉　（文化元年）

出典　文化句帳（文化1・8）

蒔捨の菜のうつくしき夜寒哉　（文化元年）

出典　文化句帳（文化1・10）

夜寒さへ川さへ住ば住れけり　（文化三年）

出典　文化句帳（3・9）

門の木に階子かかりて夜寒哉　（文化六年）

出典　随斎筆紀（文化6）

㊟　雉啄編『鳴の井』（文化6刊）所収句として記す。文化五年八月句日記には、中七「階子かゝりし」。

芦に舟いかにも〳〵夜寒也　（文化七年）

出典　七番日記（文化7・7）

鳩部屋に鳩が顔出す夜寒哉　（文化十年）

出典　七番日記（文化10・8）

両国の両方ともに夜寒哉　（文化十年）

出典　七番日記（文化10・7）・志多良・文政版発句集・嘉永版発句集

㊟　志多良・文政版発句集・嘉永版発句集、前書「茶店の万燈日まし二へりぬ」。句稿消息、前書「茶店の万燈きのふと成りぬ」、中七「両方一度に」。発句題叢・希杖本句集、中七「両方一度に」。

あばら骨なでじとすれど夜寒哉　（文化十年）

出典　七番日記（文化10・8）・志多良・句稿消息・文政版発句集・嘉永版発句集

六十に二つふみこむ夜寒哉　（文化十一年）

出典　七番日記（文化11・7）・文政版発句集・嘉永版発句集

㊟　七番日記、中七「二ッふみこむ」。文政版発句集、中七「ふたつふみ込」。嘉永版発句集、中七「ふたつふみ込」。

次の間の灯で飯を喰ふ夜寒哉　（化文十二年）

出典　七番日記（文化12・8＝重出、15・6・7）

㊟　希杖本句集、前書「旅」「一人と帳面につく夜寒かな」の次に、「おなじ心を」と前書して、中七「行燈で寝る」。文政版発句集・嘉永版発句集、「一人旅」と前書して、中七以下「灯で膳につく寒哉」。

ならはしや木曽の夜寒の膝頭　（文化十二年）

出典　七番日記（文化12・8）

身一つ是は朝寒夜寒哉　（文化十三年）

出典　七番日記（文化13・閏8）

いろりから茶の子掘出す夜寒哉　（文化十四年）

出典　七番日記（文化14・9）

㊟　中七「茶〔の〕子堀出す」。

一人と帳面につく夜寒かな　（文政元年）

出典　文政版発句集・希杖本句集・嘉永版発句集

㊟　文政版発句集・希杖本句集・嘉永版発句集、前書「旅」。七番日記（文政1・7）、中七以下「帳に付たる夜寒哉」。七番日記（文政1・5、6）、中七以下「書留らるゝ夜寒哉」。

汁の実のほちや〳〵ほけて夜寒哉　（文政八年）

出典　文政句帳（文政8・9）・梅塵抄録本連句集

㊟　発句鈔追加、中七「見事にほける」。

冷やか

背中から冷かゝりけり日枝の雲　（文化三年）

出典　文化句帳（文化3・8）

㊟　座五「日枝〔の〕雲」。

冷つくや背筋あたりの斑山　（文化四年）

出典　連句稿裏書（文化4・秋）

㊟　中七「背すじあたりの」。

下冷や臼の中にてきりぎりす　（文化十四年）

出典　七番日記（文化14・8）

㊟　座五「きり〴〵す」。

有　明

有明やさらしな山も通りがけ　（文化元年）

出典　文化句帳（文化1・8）

㊟　前に「二竹しなのへかへる」の記事あり。

有明や窓からおがむ善光寺　（文化十三年）

出典　七番日記（文化13・9）

㊟　中七以下「窓からおがむ(を)ぜん光寺」。

秋　日

秋の日や山は狐の嫁入雨　（文政六年）

出典　文政句帳（文政6・9）

㊟　座五「嫁入り雨」。

秋の夕

山見ても海見ても秋の夕哉　（寛政――）

出典　西国(寛政)紀行書込（寛政7）

㊟　中七「海見て〔も〕」。

秋の暮

一つ鵜の水見てゐるや秋の暮　（享和三年）

出典　享和句帳（享和3・9）

㊟　前書「候人」。

こつ〳〵と石などもきる秋の暮　（文化三年）

出典　未詳

又人にかけ抜れけり秋の暮　（文化三年）

出典　文化三―八年句日記写（文化句帳補遺）（文化3・9）

象潟や田中の嶋も秋の暮　（文化八年）

出典　我春集（文化8）

㊟　中七「田中の島も」。

梟と見しはひが目か秋の暮　（文化八年）

出典　七番日記（文化8・9）

なか〳〵に人と生れて秋の暮　（文化八年）

出典　我春集（文化8）

病後

えいやつと活た所が秋の暮（文化十年）

出典　七番日記（文化10・7）・句稿消息（文化10）・文政版発句集・嘉永版発句集

㊟　七番日記、前書ナシ、上五「エイヤッと」。句稿消息、上五「ゑいやつと」。文政版発句集、上五「ゑいやつと」。座五「秋のくれ」。嘉永版発句集、上五「ゑいやつと」・座五「あきの暮」。

ぎつくりと浅黄の山や秋の暮　（文化十一年）

出典　七番日記（文化11・8）

㊟　発句鈔追加、上五、中七「きつかりと山は浅黄に」。

むさし野に投出す足や秋の暮　（文化十一年）

出典　七番日記（文化11・9）

㊟　上五・中七「むさし野へ投出ス足や」。

馬の子も旅に立也秋の暮　（文化十三年）

出典　七番日記（文化13・8）

㊟　八番日記（文政2・9）、中七「旅さす〔る〕かよ」。

我家も一里そこらぞ秋の暮　（文政元年）

出典　七番日記（文政1・2）

床の間の杖よわらじよ秋の暮　（文政元年）

出典　七番日記（文政1・8）

㊟　中七「杖よわらじよ」。

一二三四と薪よむ声や秋の暮　（文政元年）

出典　七番日記（文政1・8）

連にはぐれて

一人通ると壁にかく秋の暮　（文政二年）

出典　八番日記（文政2・6、7）・おらが春・だん袋

㊟　八番日記、前書ナシ。六月の条、上五「一人通ル」。七月の条、中七「とかべに書」。おらが春、中七「と壁に書く」。だん袋、前書「連にはぐれたる夕暮に」、中七「と壁ニ書く」。

膝抱て羅漢顔して秋の暮　（文政二年）

出典　八番日記（文政2・8）・だん袋・発句鈔追加

㊟　風間本八番日記、中七「寝(羅)漢顔して」。梅塵本にこの句ナシ。だん袋、中七「羅漢顔して」。発句鈔追加、中七以下「羅漢顔して秋のくれ」。

おれのみの舟を出す也秋の暮　（文政三年）

出典　八番日記（文政3・7）

㊟　風間本八番日記、上五「おれのみ〔は〕」。梅塵本八番日記、上五「おれのみは」。全集本は「おれのみ〔が〕」（風間本）と校訂。ただし、発句篇では「おれのみ〔は〕」。資文堂版、大久保逸堂・栗生純夫『一茶八番日記』は、「おれのみの」と校訂。梅塵本に従うべきであろう。

それがしも宿なしに候秋の暮（文政三年）

出典　八番日記（文政3・7）

㊟　前書「さどが島」。

善光寺の柱に、長崎の旧友、昨二日通るとありけるに

知つた名のらく書見へて(ママ)秋の暮　（文政五年）

出典　文政句帳（文政5・9）・だん袋

㊟　文政句帳、中七「らく書見へて(え)」。だん袋、「前書善光寺ニ詣けるに、長崎の旧友きのふ通るとありければ」。中七「楽書見へて(え)」。文政版発句集・嘉永版発句集に、「八月二十九日善光寺詣。本堂の柱に長崎の旧友たれかれ八月二十八日詣るとしるしあありけるに（以下略）、の文に、「近づきの楽書見へて(え)秋の暮」と添えてある。嘉永版では中七「楽書見えて」と仮名づかいを改めている。全集本は、「八月二十九日……」の注に、『文政句帳』五年九月の条に善光寺の柱に、長崎の旧友昨二通るとありけるに」と前書きがあって、「近づきの……」の句がみえる、と誤る。

おさな(ママ)子や笑ふにつけて秋の暮　（文政六年）

出典　文政句帳（文政6・9）・だん袋・一茶翁終焉記・文政版発句集・嘉永版発句集

㊟　文政句帳、上五「お〔を〕〔さ〕な子や」。だん袋、前書「母ニおくれたる二つ子の這ひならふに」、上五・、中七「おさな子や笑ふニつけて」。終焉記、上五「おさな子や」。文政版発句集、前書「母のなき子の這ひならふに」、上五「をさな子や」。嘉永版発句集、前書「母のなき子の這習ふに」、上五「をさな子や」。

古郷は雲の先也秋の暮　（文政十年）

出典　文政九・十年句帳写（文政10）・希杖本句集

㊟　希杖本句集、中七「雲の先なり」。

秋の夜

秋の夜や旅の男の針仕事　（寛政五年）

出典　寛政句帳（寛政5）

秋の夜や窓の小穴が笛を吹　（文化八年）

出典　七番日記（文化8・9）

㊟　我春集、中七「せうじの穴が」。文政版発句集・嘉永版発句集、中七「障子の穴の」。

夜長

すりこ木もけしきにならぶ夜長哉　（文化元年）

出典　文化句帳（文化1・9＝重出）。

㊟　十三日の条に、「スリコ木もけしきにならぶ夜永哉」。二十三日の条に、前書「貧交」、中七「けしきに並ぶ」。

久しく臥たる善光寺の閨を放れて、長沼にやどる夜

蚤どもが夜永だらうぞ淋しかろ　（文化十年）

出典　志多良（文化10）・句稿消息

㊟　志多良、前書「……長沼にやどる」、中七「夜〔永〕だろうぞ」。七番日記（文化10・9）、前書ナシ、中七「さぞ夜永だろ」。志多良、「桂好亭にわづらふこと七十五日にして、九日五日といふ日に、筇にすがりて、……長沼の郷に入。……三本亭にやどる。其夜大熱兆して眠られぬ物から、長〳〵寝馴れたる善光寺の閨の灯かげなど、見るやうに覚へてしたはしく、『蚤どもゝ夜永だろうぞ淋しかろ』」。初案である。文化十年九月二十八日付西原文虎あて書簡、上五・中七「虱ども夜永かろうぞ」。

あばら骨あばらに長き夜也けり　（文化十年）

出典　七番日記（文化10・8）

㊟　この句の一句前に、中七以下「あばら骨なでじとすれど夜寒哉」。

暮の秋

天広く地ひろく秋もゆく秋ぞ　（寛政――年）

出典　たびしうゐ（寛政7・秋）

㊟　亜堂・孚舟・升六・仙所・井眉・蘭戸・蒐江一座の脇起し歌仙の立句。

鳥おりて秋の暮るぞ小梅筋　（文化二年）

出典　文化句帳（文化2・閏8）

天の川

破なべも夜はおもしろ天の川　（享和三年）

出典　享和句帳（享和3・7）

㊟　座五「天〔の〕川」。

我星はどこに旅寝や天の川　（享和三年）

出典　享和句帳（享和3・7）

㊟　七番日記（文化9・7）、中七「どこ〔に〕どうして」。株番、中七「どこにどうして」。八番日記（文政4・7）、中七「今は旅寝や」。

病中

うつくしや障子の穴の天の川　（文化十年）

出典　七番日記（文化10・7）・志多良・句稿消息・文政版発句集・希杖本句集・嘉永版発句集

㊟　七番日記、前書ナシ、中七「せうじの穴の」。志多良、前書「七夕病中」、中七「せうじの穴の」。句稿消息、前書「病」、中七以下「せうじの穴の天川」。文政版発句集・嘉永版発句集、前書「病中」。希杖本、「病中」と前書した四句中の第二句として出。

木曽山に流入りけり天の川　（文政元年）

出典　七番日記（文政1・7）

㊟　七番日記、中七「流入けり」。八番日記（文政3・7）、上五「古郷に」。

古郷に流込けり天の川　（文政三年）

出典　八番日記（文政3・7）

㊟　中七「流入けり」。

おのが田へ夜水を引て天の川　（文政四年）

典出　八番日記（文政4・9）

秋の月

やぶ陰も月さへさせば我家哉　（文化元年）

出典　文化句帳（文化1・8）

かつしかや月さす家は下水端　（文化二年）

出典　文化句帳（文化2・閏8）

汁の実を取に出ても月よ哉　（文化二年）

出典　文化句帳（文化2・閏8）

たまに来た古郷の月は曇りけり　（文化四年）

出典　連句稿裏書（文化4・8）

月も月抑大の月よ哉　（文化九年）

出典　七番日記（文化9・8）・株番・発句題叢・希杖本句集・嘉永版発句集・発句鈔追加

㊟　七番日記、中七「抑〳〵年の」。株番、中七「そも〳〵大の」。発句題叢、中七以下「そも〳〵大の月夜哉」。希杖本句集・嘉永版発句集、中七以下「そも〳〵大の月夜かな」。発句鈔加追、中七以下「そもそも大の月夜かな」。

そば時や月のしなのの善光寺　（文化九年）

出典　七番日記（文化9・8）

㊟　中七「月のしなのゝ」。

あの月をとつてくれろと泣子哉　（文化十年）

出典　七番日記（文化10・8）・志多良・文化十年八月二十二日付滝沢可候あて書簡

㊟　おらが春・文政版発句集・嘉永版発句集、上五「名月を」。

君が代もおらが世をも月よ哉　（文化十一年）

出典　七番日記（文化11・7）

のら〳〵とべら棒桐の月夜哉　（文化十一年）

出典　七番日記（文化11・7）

㊟　上五「のら〳〵〔と〕」。

貝殻の山からも出る秋の月　（文化十四年）

出典　七番日記（文化14・2）

名所や壁の穴より秋の月　（文政八年）

出典　文政句帳（文政8・9）

山寺や月も一間に一つづつ　（文政八年）

出典　文政句帳（文政8・9）

㊟　座五「一ッヅゝ」。

盆の月

もろこしを堤であぶるや盆の月　（文政四年）

出典　八番日記（文政4・8）

㊟　上五「まろ(も)けし(こ)を」。八番日記文（化、4・7）、中七「あぶり焦すや」。

峰越る越後同者（ママ）や盆の月　（文政四年）

出典　八番日記（文政4・7）

三日月

むだ草も穂に穂が咲ぞ三日の月　（文化十一年）

出典　七番日記（文化11・9）

㊟　座五「三ヶの月」。梅塵本八番日記、前書「豊秋」、中七以下「穂にほが咲て三日の月」。

名　月

草の雨松の月夜は十五日　（享和三年）

出典　享和句帳（享和3・11）

㊟「草の雨松の月よやかへる雁」の後一句おいて、中七以下「松の月よやかへる雁（十五日）」。

芥藪そも名月の夜なりけり　（文化五年）

出典　文化五・六年句日記（文化6・8）

㊟　座五「夜也けり」。

久しく願ひけるに、北国日より定めなくておもひはたさざるに、今年文化六年八月十五日、同行二人姥捨山に登る事を得たり

けふといふ今日名月の御側哉　（文化六年）

出典　文化三（文化句帳補遺）―八年句帳写（文化6）・堇草・発句題叢・文政版発句集・嘉永版発句集・発句鈔追加

㊟　文化三―八年句日記写、前書「姥捨山」。堇草、前文「おもひはたさるゝ（ざる）に」、「ことし文化八年……」。発句題叢・文政版発句集、前書「姥捨山」、中七「けふ名月の」。嘉永版発句集、前書「姥捨山」、中七以下「けふ名月の御側かな」。発句鈔追加、前文「……今年文化八年八月十五日はからずも同行二人姥捨山にのぼることを得たり」、中七「けふ名月の」文化五・六年句日記（文化6・8）、中七以下「けふ名月の御山哉」。

名月や暮ぬ先から角田川　（文化八年）

出典　七番日記（文化8・8）

㊟　前書「去廿日花川戸六兵衛喜兵衛妻ちよ、親孝行銀五枚公ヨリ賜ル」。

名月や高観音の御ひざ元　（文化八年）

出典　七番日記（文化8・7）・我春集

名月やとばかり立居むづかしき　（文化十年）

出典　七番日記（文化10・8）・志多良・文政版発句集・嘉永版発句集

㊟　七番日記、上五・中七「名月〔や〕とばかり立い(ゐ)」。志多良、中七「とばかり立居」。文政版発句集・嘉永版発句集、前書「病中」。

山里は汁の中迄名月ぞ　（文化十年）

出典　七番日記（文化10・7、文政1・8）、句稿消息

㊟　八番日記（文政3・8）、中七「小鍋の中も」。

藪原やばくちの銭も名月ぞ　（文化十一年）

出典　七番日記（文化11・8）

名月や西に向へばぜん光寺　（文化十二年）

出典　七番日記（文化12・1）・発句鈔追加

㊟　発句鈔追加、前書「長沼にて」、座五「善光寺」。

名月やあなたも先は御安全　（文化十二年）

出典　七番日記（文化12・7）

㊟　中七「あなたも先〔は〕」。文政版発句集、中七「先はあなたも」。嘉永版発句集・文政四年八月十二日付西原文虎あて書簡、中七「まづはあなたも」。

漂泊四十年

ふしぎ也生れた家でけふの月　（文化十三年）

出典　七番日記（文化13・8）

㊟ 中七「生〔れ〕た家で」。

名月や石の上なる茶わん酒　（文化十三年）

出典　七番日記（文化13・8）

名月の小すみに立る蘆家哉　（文政元年）

出典　七番日記（文政1・12）

名月や松に預ける庵の鍵　（文政二年）

出典　八番日記（文政2・8）

㊟ 八番日記、「名月や」の四句後に、「庵のかぎ松にあづけて月見哉」。

籾蔵の蔭の小家も月見哉　（文政二年）

出典　八番日記（文政2・8）

㊟ 「名月や松に」の次に出。

名月や膳に這よる子があらば　（文政二年）

出典　八番日記（文政2・7）

名月や五十七年旅の秋　（文政二年）

出典　八番日記（文政2・8）

㊟ 「名月や松に」の十二句前に出。

名月やおれが外にも立地蔵　（文政三年）

出典　八番日記（文政3・8）

名月や出家士諸商人　（文政四年）

出典　八番日記（文政4・8）

名月や茶碗に入れる酒の銭　（文政四年）

出典　八番日記（文政4・9）

有合の山ですますやけふの月（文政四年）

出典　八番日記（文政4・9）・一茶翁終焉記・文政版発句集・嘉永版発句集

㊟　八番日記、前書「姥捨なんど〻草臥るも全なければ」。一茶翁終焉記・文政版発句集・嘉永版発句集、前書「姨捨などとは老足むつかしく」。

名月や生たままの庭の松　（文政五年）

出典　文政句帳（文政5・8）

㊟　中七「生たま〻の」。

名月や山有川有寝ながらに　（文政五年）

出典　文政句帳（文政5・8）

やかましき老妻ことしなく

小言いふ相手もあらばけふの月　（文政六年）

出典　文政句帳（文政6・9）・一茶翁終焉記・文政版発句集・嘉永版発句集

㊟　文化句帳（6・9）、一茶翁終焉記、前書ナシ。文政版発句集・嘉永版発句集、前書「やかましかりし老妻ことしなく」。

赤間関

名月や蟹も平を名乗り出　（文政九年）

出典　文政九・十年句帳写（文政9）・文政版発句集・嘉永版発句集

㊟ 文政版発句集・嘉永版発句集、前書「赤馬関」。

明月の御覧の通りくづ家哉　（文政版一茶発句集）

出典　随斎筆紀・繫橋（文化6）・古今俳人百句集（文化15）・近世発句類題集（文政3）・文政版発句集・嘉永版発句集

㊟ 繫橋・俳人百句集・類題集、座五「屑家哉」。文化五年八月句日記、座五「屑家也」。

八幡の御手洗川

名月や流れに投る嗽銭　（しだら）

出典　希杖本句集

月蝕

人の世は月もなやませ給ひけり　（文政二年）

出典　八番日記（文政2・9）・だん袋・おらが春・希杖本句集・発句鈔追加

㊟ 八番日記、前書ナシ、座五「たまいけり」。梅塵本八番日記、前書「蝕十五夜」、座五「給ひけり」。だん袋・おらが春、上五「人の世ハ」。おらが春、「月蝕皆既（亥七刻左方ヨリ欠、子六刻甚ク丑ノ五刻左(右)終）」と前書した四句中の第二句。希杖本句集、前書「蝕十五夜」。発句鈔追加、前書「名月の月欠」、座五「たまひけり」。

後の月

積薪の一つ二つや後の月　（文政三年）

出典　梅塵本八番日記（文政3）

㊟ 中七「一ッ二ッや」。

蕣の再び咲や後の月　（文政四年）

出典　八番日記（文政4・9）

㊟　中七「再咲や」。梅塵本八番日記、「朝がほの再び咲きや后の月」。

秋の空
橋見へて暮かかる也秋の空　（文化元年）
出典　文化句帳（文化1・9）
㊟　前書「祇兵とゝもに、相生町見に行。かへるさ両国茶店にて」。上五・中七「橋見へて暮かゝる也」。

秋日和
刈株のうしろの水や秋日和　（享和三年）
出典　享和句帳（享和3・9）
㊟　前書「下泉」。

順礼が馬にのりけり秋日和　（文政元年）
出典　七番日記（文政1・9）

秋の雨
口明て親待鳥や秋の雨　（享和三年）
出典　享和句帳（享和3・10）

松の木も在所めきけり秋の雨　（享和三年）
出典　享和句帳（享和3・9）
㊟　「口明て」の一句前に出。

秋の雨つい夜に入し榎哉　（享和三年）
出典　享和句帳（享和3・8）

㊟ 中七「つい(ひ)夜に入し」。

喰捨の瓜のわか葉や秋の雨　（享和三年）

出典　享和句帳（享和3・8）

㊟ 「秋の雨」の二十九句前に出。

山畠や鳩が鳴ても秋の雨　（文化二年）

出典　文化句帳（文化2・8）

ほろ〳〵とむかご落けり秋の雨　（文化二年）

出典　文化句帳（文化2・8）

㊟ 座五「秋〔の〕雨」。

祭小屋皆も払はず秋の雨　（文化五年）

出典　文化五・六年句日記（文化6・8）

薬呑む馬もありけり秋の雨　（文化五年）

出典　文化五・六年句日記（文化6・8）

夕暮や其上に又秋の雨　（文政元年）

出典　七番日記（文政1・9）

堂守と撞木と寝たり秋の雨　（文政二年）

出典　八番日記（文政2・9）

㊟ 中七「しゆきに寝たり」。井泉水編俳句集は、「しゆもく」とルビを付す。

二軒家や二軒餅つく秋の雨　（文政三年）

出典　梅塵本八番日記（文政3）・文政版発句集・嘉永版発句集

㊟　風間本八番日記、上五「二軒やは」。

餅草のほちや〳〵ほけて秋の雨　（文政四年）

出典　八番日記（文政4・9）

㊟　上五・中七「もち草のおちや〳〵ほけて」。梅塵本八番日記、上五・中七「餅草のほちや〳〵ほけて」。文化三―八年句日記写（文化6）、中七「ぽた〳〵ほりて」。

〈前稿訂正〉　数字上・ページ数、下行数

7・16文化→文政　8・15文化→文政　8・16文化15・4→七番日記　11・14寛政春年春→寛政三年春　19・2文化→文政